

(様式第4号)

上田市認知症高齢者等支援ネットワーク協議会 会議概要

1 審議会名	上田市認知症高齢者等支援ネットワーク協議会
2 日 時	平成31年2月12日 午後1時30分から午後3時00分まで
3 会 場	西部公民館 第5会議室
4 出 席 者	飯島委員長、鷹野副委員長、佐藤委員、滝澤委員、福澤委員、平井委員、栗俣委員、宮原委員(代理)、杳掛委員、中澤敏正委員、清水委員、三宅委員、前田委員、大谷委員、山田委員、中澤純一委員、友野委員(代理)
5 市側出席者	近藤福祉部長、緑川高齢者介護課長、斉藤高齢者支援担当係長、矢野高齢者支援担当係長、大木高齢者支援担当、石井高齢者支援担当、召田認知症地域支援推進員
6 公開・非公開	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 ・ <input type="checkbox"/> 一部公開 ・ <input type="checkbox"/> 非公開
7 傍聴者	0人 記者 0人
8 会議概要作成年月日	平成31年2月26日

協 議 事 項 等

1. 開会

2. あいさつ(福祉部長)

3. 協議事項

(1) 平成30年度上田市認知症高齢者等施策実施状況について

(資料に基づき、事務局より説明)

【平成30年度の認知症施策に関する事業の実施状況】H30実績は平成30年12月31日現在

「①もの忘れ・認知症相談」平成30年度は21回開催し、相談件数は16件。相談者数は多くないが、定期的にある程度時間を決めて相談する機会を作っておくことが大切であると考えている。

「②認知症講演会」認知症講演会は「認知症になっても安心して暮らせるまちづくりを」目指し、毎年企画・開催。本年度は長野大学で「認知症とともに笑顔で生きる～当事者の声を聴こう～」をテーマに、午前中に座談会形式の本人ミーティング、午後に講演会とシンポジウムを開催。

講演会では若年性認知症当事者の丹野智文さんとパートナーの若生栄子さんにご講演いただき、シンポジウムでは、飯島委員をコーディネーターに、上小医療圏認知症疾患医療センター長の小林美雪先生にもご参加いただいた。参加者は200名を超え、長野大学の学生にも大勢ご参加いただいた。

「③認知症サポーター養成講座」今年度は1,539人が受講。これまでに延べ14,176人の方が受講。市民の認知症に対する意識の高さを感じている。

平成29年度からは市職員向けにも養成講座を開催。認知症の方やそのご家族の意思を尊重した適切な行政サービスを提供するため、来年度以降も継続して実施していく。

地域で活動できるサポーターを育成する目的で、「サポーターステップアップ講座」も開催している。意欲のある方もいるので、そのような方の地域での取り組みに期待している。

「⑤認知症見守りネットワーク事業」行方不明の恐れのある方の情報を登録し、市、警察、地域包括支援センターと情報を共有するもの。制度が定着し、年々登録者が増えている。

「⑨認知症初期集中支援チーム」別紙2参照。認知症初期集中支援チームは平成29年4月に設立し、今年で2年目。本人の支援拒否や本人・家族が精神疾患等を患っているまたはその疑いがあるケースなど、困難事例も多いが、多職種チームで粘り強く活動し、今後も「認知症の早期診断、早期対応」に対し、効果的に支援できるようにしていきたい。

「⑩認知症疾患医療センター(地域型)との連携」昨年10月1日に千曲荘病院が、県より上小医療圏認知症疾患医療センターとして指定された。これまでも千曲荘病院には市の認知症施策に積極的に

関わっていただいている。今回の指定を受け、千曲荘病院の役割は今後ますます重要なものと期待している。市もこれまで以上に千曲荘病院と連携を深め、認知症施策を推進していきたい。

「⑫上田市認知症カフェ設立資金助成事業補助金」認知症カフェの設立に必要な備品などの経費に対する市独自の補助金。本年度、補助金の申請はないが、千曲荘病院内の「あったーカフェ」や千曲高校の生徒が開催している「ちくまハートカフェ」など、補助金を利用せず単独で設立・運営されているカフェもあり、重要な社会資源の一つとして広がりを見せている。

(2) 認知症高齢者等見守りシール交付事業について

認知症により、外出時に行方不明になるおそれのある高齢者のかたが、万が一が行方不明になった場合の早期発見、事故の未然防止、本人だけでなく、介護されているかた、ご家族のかたの負担の軽減を図るため、平成 30 年度から、認知症高齢者等見守りシール交付事業を実施することとし、10 月から配付を開始。

認知症高齢者等見守りシール交付事業の仕組みは、見守りシールを衣服等に貼り付けておくと、万が一が行方不明になり、発見・保護された際、発見者がシールに記載されている QR コードをスマートフォンで読み取ることで、家族等へ連絡（メール送信）が行くだけでなく、伝言板機能を通じ迅速に連絡を取り合うことができる。

読み取りした発見者と家族等とは伝言板機能を使って連絡するため、お互いの個人情報には触れることがない。また、市（管理者）では連絡の履歴を確認することができ、情報の把握が可能。

シールは耐洗ラベル（アイロンで衣服・帽子等に貼り付け）と蓄光シール（杖・鞆等に貼り付け、明るいとこで光を吸収して暗いところでも光を放つもの）の 2 種類。

交付対象者は、認知症により、外出時に行方不明になるおそれのある高齢者のかた。

利用料ですが、初回交付分は無料（耐洗ラベル 30 枚、蓄光シール 10 枚）。月額使用料等はなし。

2 回目以降・追加購入は自己負担あり（初回と同じ内容で、1 セット 3,600 円くらい）。

耐用年数は耐洗ラベル 2 年、蓄光シール 1 年以上使用可。

● 質疑応答

(委 員) 見守りシールは、認知症であると周囲が分かってしまう一面があるのではないか。

(事務局) 確かに、認知症のサインになりうる。利用者にはそのことを説明し、理解いただいた上で利用いただいている。まずは、早期発見に役立てていただきたい、ということ。

また、認知症であることを隠すのではなく、公表して周囲に助けてもらうことのきっかけになればと考えている。

(委 員) これから認知症の方が増えていく。行政だけではなく、地域でもできることを考えていきたい。

(3) 委員からの問題提起等

● 見守りシールの周知方法について

(事務局) ポスター掲示、認知症ケアパスへのちらしの挟み込み、認知症サポーター養成講座でも紹介してもらっている。将来的には、模擬訓練を行いたい。広報うえだでも特集組む予定。

● 認知症講演会への感想から

(事務局) 講師（若年性認知症の当事者）から、認知症になると周囲の人が皆手伝おうとしてくれる。でも、認知症の方でもできることがある。先に手を出すのではなく、本人の意見を聞いてから支援していくことが大事との話だった。来年度も認知症になっても暮らせる街を目指して、講演会を企画していきたい。委員の皆さまからテーマや講師などの要望があればご

意見をお聞きしたい。

●介護事業者と地域の方との連携について

(事務局) 認知症サポーター養成講座を開いて市民に対して一般的な啓発には努めているが、個々の事例については個別の連携を構築していく必要があると考える。地域包括支援センターや市でも一緒に取り組んでいくので、事業者の方、地域の方からご相談いただきたい。

●認知症の方の損害保険について

(事務局) 大和市、海老名市等で行政が保険に加入する形で行っている情報あり。

認知症になっても暮らしやすい街づくりの一環として、国は「公的な救済制度は難しい。民間保険の紹介が望ましい」との意見であり、上田市でも希望があれば民間の保険を紹介している。

(委員) 上田市では、保険に関する補助等は検討していないということか。

(事務局) まだ検討していない。

(4) その他

(委員長) 今期の委員の任期中の会議は今回が最後。委員の皆さまから一言ずつ提言、要望、また感想などでもけっこうなので、発言をお願いしたい。

(委員) 権利擁護の部分で関わることが多いが、地域で支えること、地域のつながりが大事だと知った。

(委員) 今回代理で初めて出席。こういった話し合いの場があるのだな、と。地域でのつながりや理解が大事だと思うので、これからもその視点をもって関わっていききたい。

(委員) 色んな業種の方と話せてよかった。高齢者、足がなくて困っている人が多い。病院受診の移動支援が一番の悩み。定期受診であれば公的な外出サービスを調整できるが、急な風邪などの突発的な時、困難。また、外出先が病院に限られる。地域の催しなど出かけられる場所があれば誘ってもらいたい。

(委員) ショートステイは、家族の希望ということが多く、本人にも戸惑っている様子がある。本人に力がある人もおり、力が発揮できるよう施設の方でも沢山関わることができればいいが、人材に限りがある。でも、家族だけでは難しいだろうから一助になれば。

(委員) 認知症の一人暮らしの方の支援が難しい。ヘルパーがずっといて見守ることはできない。近隣の方より、夜間に家に来て困る、との訴えもある。課題はあるが、できるだけ在宅で生活できるよう支援していければ。

(委員) 家族支援をやっている気になることは、本人の意志はどこにあるのか、ということ。本人の意志に基づいた選択が行われているのか。デイサービスがつぶれたり、ひまだと言っているヘルパー事業所もある。在宅支援の3本柱と言われているサービスがこんな状態で在宅生活を支えられるのか。

要介護3になったら施設に入る…介護認定がボーダーラインになっている。本人はまだ在宅を希望しているのに。周りから言われて施設にいれるケースあり。

本人、家族はなかなか「支えてください」と言えない。支援する人ばかりをつくるばかりではなく、「支援してほしい」と声をあげられる機会を作っていくことも必要。

ネットワーク協議会、3期を終えて、どんなネットワークを築くことができたのか。

(委員) 地域の人の中には、認知症の人に対して悪口を言う人がいる。家族は、地域にでてもらいたいという思いで出しているのだが、地域の人にもっと認知症のことについて知ってもらいたい。

(委員) 地域にいて、認知症という言葉を知ってはいても認知症の人に何をしたらいいのか、いざとなると、どうしたらよいか分からないところがある。地域で生活することは当たり前のことなのに、難しいと感じる。

(委員) 先日、認知症カフェに行ってきた。アンテナは張っているつもりだが、近所の人は家族に認知症の方がいるとは話さない。認知症の人もいっしょにできることがあればいい。

(委員) 認知症という言葉は知っていたが、委員を引き受けた一か月後に認知症の親族を家に引き取ることになり、どうしたらいいかわからないまま介護に入った。行政の方には手続きやサービスをいろいろ教えてもらって助かった。在宅で普通に生活できればいいが、行動に振り回されて家族が大変となるケースもあるのでは。

(委員) 認知症のお一人暮らしの方に関する相談が増えている。地域の見守りネットワークを築いていくことが必要と分かっているが、とりかかれないでいる状態。

認知症の方の独居、近所も高齢、親族は遠方で、どうしようと困っている人多い。介護度があがれば施設へ、という意見もあるが、本人の希望などもあり、施設入所は中々難しいのが現状。できることから始めようと、思っている。

(委員) 認知症の方や虐待で高齢者への関与が増えている。会議で学んだこと、所属で情報共有し、学ばせてもらっている。関与した高齢者について、市や包括へ相談すると、訪問して状態を確認して、判断してくれるので、助かる。

孤独死について、地域のつながりがうすくなっているのかも。こういった人たちをどう少なくしていくか、また考えていかななくてはいけない。

(委員) 県の第7期計画でも本人、家族の意見を尊重と謳っている。事業者への啓発を行っている。地域の方との情報共有を今後も行っていきたい。

(委員) 徘徊高齢者の捜索にできることがあるが、情報が少なく、どこを探したらよいか分からないことがある。見守りネットワークに情報がある場合は、情報を提供してもらえるとありがたい。

(委員) 行方不明の捜索や怪我への対応で認知症の方と関わる機会がある。今後も関係部署で連携をとって、何かの際には協力してやれたら。

(委員) 見守りネットワークどうつくっていけばいいか、高齢者の支援もどうすればよいか悩むことは多い。地域を回る仕事なので、認知症の人がいたらどこに相談をつないでいけばよいか…包括や市へつないでいきたい。

これからもっと高齢者や認知症の方が増えていくので、連携をとってやっていきたい。

(委員長) こんなに超高齢化社会になるとは。身体の寿命より先に頭の寿命がくる。認知症は長寿化のパラドックス。又、家族は第二の患者さんでもある。地域や社会で支えて行かなくてはならない。簡単ではないが、長寿を獲得してきた人間にならざるはず。

この会が、専門家が一同に介して、何に困っているのか、行政はどんなことをしているのか、活発に情報交換できる場、情報が行き来する場になっていければ。

(事務局) 貴重な御意見をありがとうございました。今後の施策、会の運営に活かしていきたい。

(5) 閉会